

II. 旧石器・縄文時代の人々（野添遺跡4次調査）

8万年前の大災害 皆さんご存知のとおり、九州には長崎県の雲仙普賢岳^{うんぜんふげんだけ}、熊本県の阿蘇山^{あそさん}、鹿児島県の桜島^{さくらじま}など多くの火山が分布しています。これらの火山は、日本列島に人類が登場する以前から活発に活動し、現在の地形や地質、風土を形づくってきました。その反面、火山の噴火がもたらす火山灰や火砕流^{かさいりゅう}といった災害が、人々の命や暮らしを奪ってきたこともよく知られています。

私たちが暮らす大野城市の周辺には火山はなく、火山灰や火砕流といった言葉は身近に感じないかもしれませんが、今回紹介する野添遺跡^{のぞえ}では、約8万年前の火砕流の跡が見つかりました。この火砕流は阿蘇4（Aso-4）火砕流といわれ、阿蘇山の噴火により発生し、大変なスピードと高熱（400℃以上）で、森林をなぎ倒し、埋め尽くしながら、九州全域に広がっていったようです。現時点では、8万年前の九州に人々が生活していた確証はありませんが、もしこの地に人々が住んでいたならば、大きな被害を受けたことでしょう。

4次調査で確認された阿蘇4火砕流^{たいせきぶつ}の堆積物は、厚さ1.5m以上もありました。8万年もの歳月ですっかり風化し、当時の面影はないように見えますが、この土（火砕流堆積物）の中からは、蒸し焼けて炭となった樹木が見つっています。

8万年前の環境 では、この当時の環境はどのようなものであったのでしょうか。そのヒントは、この火砕流の中にもありました。火砕流で炭となった野添遺跡の樹木を調べたところ、11点のカラマツと2点のミズナラ（コナラ）であることがわかりました。このカラマツやミズナラは現在の東日本（特に東北地方）に多く見られることから、8万年前の大野城市は、現



4次調査で確認された阿蘇4火砕流の堆積物

在の東北地方と同じくらい寒冷な気候であったと考えられます。

最古の大野城市民を探す 考古学の時代区分では、今から約 12000 年以前の時代を旧石器時代と呼んでいます。先ほどの阿蘇 4 火砕流の時代も旧石器時代に含まれます。大野城市域にいつから人々が生活していたのかは、まだよくわかっていませんが、現時点では、出口遺跡（野添遺跡から北東側約 700 m）から発見された 20000 年以上前の石器（剥片尖頭器：槍の先端部分）が最も古く、すでにこのころには人々が暮らしていたことがわかります。また上大田地区でも、本堂遺跡 2 次調査で 15000 年以上前のナイフ形石器（槍の先端部分）が最近発掘されていて、この地域の歴史が大きくさかのぼることがわかりました。

野添遺跡とその周辺の縄文時代 約 12000 年前、縄文土器や弓矢を使う新しい文化が始まりました。このころから、稲作が伝わるまでの約 2500 年前までを縄文時代と呼びますが、この時代の遺跡も市内各地で発見されています。野添遺跡 3 次調査では、約 3000 年前（縄文時代後期末）の土器が見つかり、また野添遺跡のすぐ隣の本堂遺跡 5 次調査地においては、約 7000 年～8000 年前（縄文時代早期）の土器や石器が 1000 点以上も発見されました。大野城市内で、これほど多くの縄文土器や石器が見つかった例はなく、大変貴重な遺跡といえるでしょう。

この遺跡から発見された縄文土器は、押型文や撚糸文と呼ばれる当時全国的に流行した文様で飾られていました。こうした土器の文様や石器の種類・材料などから、当時の人々の交流の様子や暮らしぶりがかうかがえます。



本堂遺跡 5 次調査で出土した縄文土器

Ⅲ. 牛頸窯跡群の時代

i) 須恵器つくりと人々の生活（野添遺跡2次・8次調査）



2次調査区全景

軒の竪穴住居跡（SB01）が確認されました。出土した土器から7世紀初めの住居跡であることがわかりました。一般的に、7世紀初めの竪穴住居は竈や炉といった調理場が備えられ、平地に数軒集まって集落をつくります。しかし、SB01には、竈や炉の確認はできず、1軒だけが緩斜面に建てられていました。8次調査で確認されたSX01は、SB01同様、斜面にありました。しかしながら、このSX01の周辺は大きく削平されており、遺構の形状からは住居跡とはいい難いですが、住居跡に関係する遺構だと考えられます。出土した土器から7世紀代の遺構です。

斜面の住人 この住人が誰なのかを考える上でのヒントは斜面にあります。窯は丘陵の斜面を利用して作り、時には山深くにも作ります。須恵器を焼いたり、移動したりする時など斜面で作業する時間が多くなります。休憩や、須恵器の搬入や搬出するのに、麓まで毎回下りて

牛頸窯跡群 大野城市には、上大利から牛頸地区を中心に、北は春日市、東は太宰府市の丘陵に、6世紀中頃から9世紀中頃にかけて、須恵器という灰色の土器を生産していた『牛頸窯跡群』があります。窯の数は確認されているだけで300基以上もあり、その総数は500基ともいわれる九州最大の窯跡群です。

斜面に作られた住居 2次と8次調査で住居跡が確認されました。2次調査では、1



竪穴住居跡（SB01）



SB01 出土の土器



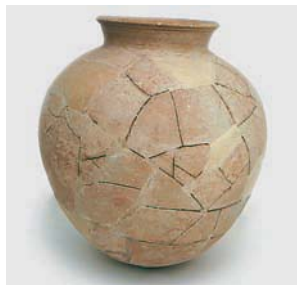
8次調査区全景



SX01



SX01 出土の高杯



SX01 出土の焼きの悪い甕

いたら大変です。そのように考えると、斜面の住居跡は住むためではなく、休憩所や窯の火の見張りをするための詰所、または、工房として使用するために作られたものでしょう。そのためにSB01内には調理場などの施設が作られな

かったと考えられます。そのような所にいる人々は、須恵器をつくる「工人」だと考えられます。その証拠に、SB01やSX01からは、焼け歪んだ土器や焼きの悪い須恵器が出土しています。これらは、近くで須恵器の生産を行っていたことがわかる資料です。

上大利の地形 上大利の丘陵の地形は、昭和23年の図を見ると、古代の面影が残っています。2次・8次調査の場所は、今より約10m以上も高いことや、8次調査の周辺の頂上部には、緩斜面の広い場所があります。近年の削平により頂上部の大部分が消滅してしまい、遺構の規模や範囲はわかりませんでした。8次調査の南北100m以内の6次・7次調査では、7世紀代の窯跡が見つかっています。8次調査で出土した土器も同時代のものなので、頂上部には、遺構が広がっていたかも知れません。

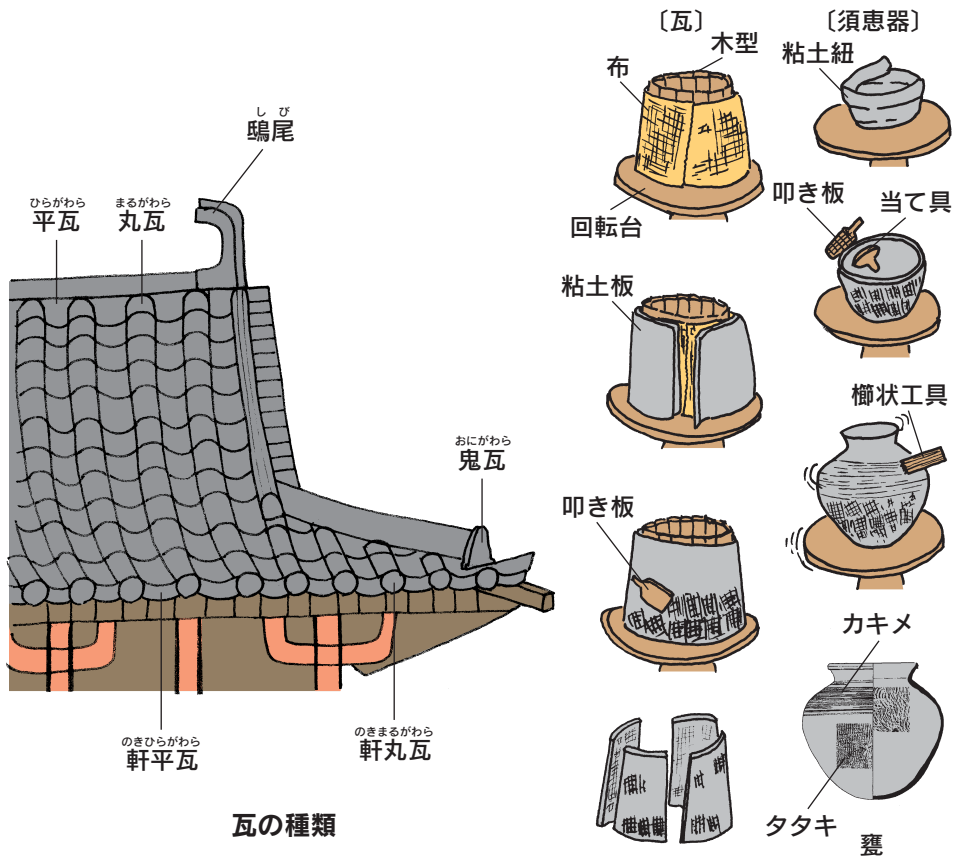
斜面での生活 工人たちは、頂上部や尾根部などの広い緩斜面を利用して堅穴住居や掘立柱建物などを建てて休憩所や工房を構え、そこを中心に窯の操業を行っていたと思われます。そして、この尾根を利用して窯と窯の間の移動や須恵器の搬入・搬出などを行っていたと考えられます。そうして、工人たちは、須恵器づくりをするための環境を整え、須恵器づくりに励んでいたことでしょう。そして、須恵器づくりが終わると、工人たちは山を下り、家族の待つ家に戻って労をねぎらってもらっていたことでしょう。

ii) 瓦つくりはじまる（野添遺跡4次・5次調査）

瓦つくりとは？ 現代では、日本中どこへ行っても瓦屋根の家が広がる風景はめずらしくありませんが、いったい日本に瓦つくりの技術が伝わったのはいつごろのことで、それはどのような製作技術で作られたものなのでしょうか？

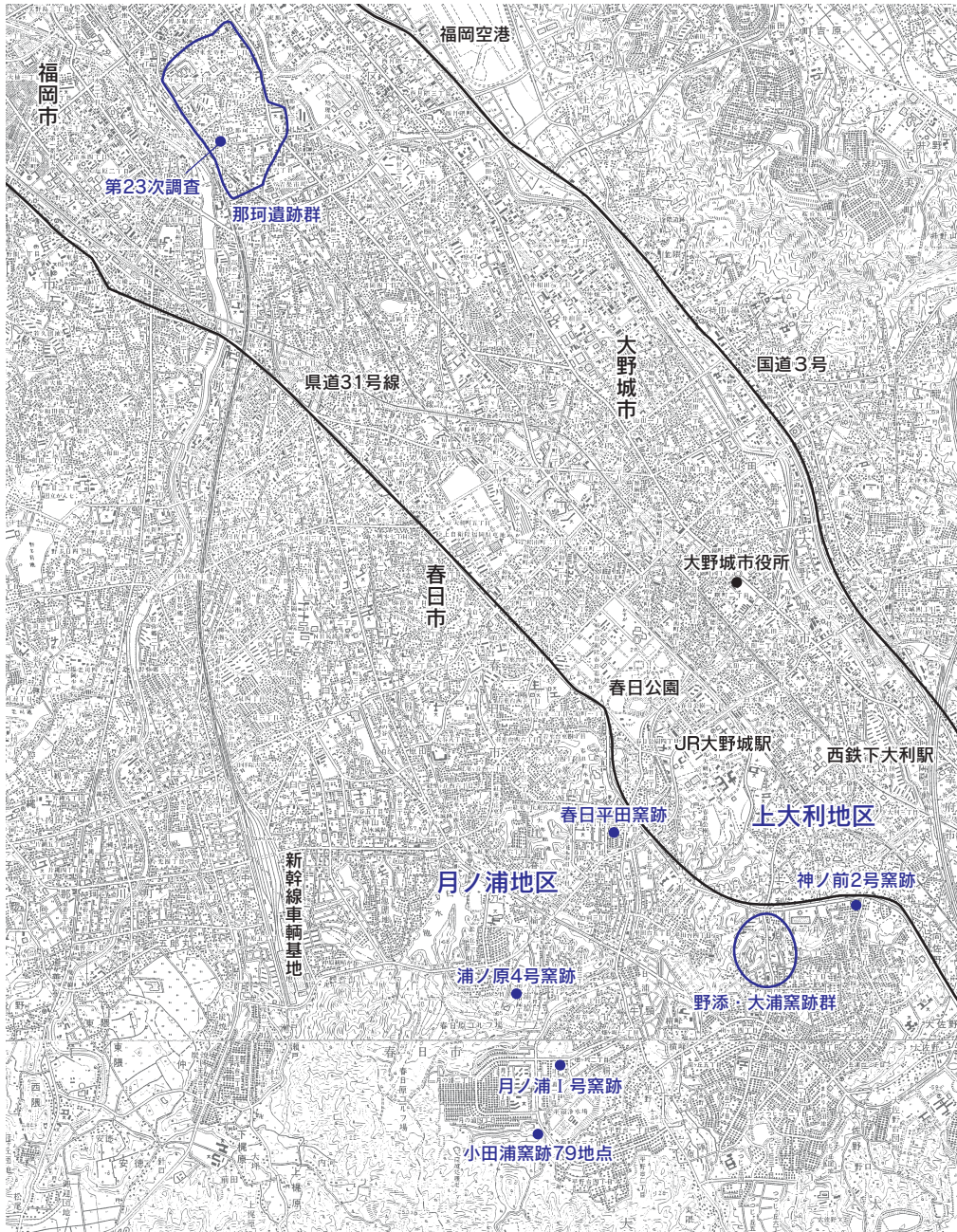
古代史や考古学の成果によると、欽明戊午年（538年）に日本に仏教が伝来してから半世紀後、崇峻二年（588年）の飛鳥寺の造営を契機に、瓦の技術は朝鮮半島の百済から寺院造営技術の一環として伝わったとされています。瓦の種類としては、屋根の大部分を占める平瓦・丸瓦、軒先に軒平瓦・軒丸瓦があり、このほか熨斗瓦・鴟尾や鬼瓦などがあります。

次に、このころの一般的な瓦つくりの方法を、代表的な平瓦を例に見てみましょう。まず木の桶のような木型の表面に粗い布をかぶせて、粘土板や粘土紐を巻きつける。次に表面を叩き板で叩きしめて形を整える。最後に木型から円筒の粘土を抜きとり、4分割して完成するのです。この方法を「桶巻作り」といい、列島各地で出土する初期の瓦に共通するものです。



瓦・須恵器の製作工程

牛頸窯跡群の瓦つくり 大陸から日本に初めて瓦がもたらされた6世紀終わりごろ、牛頸窯跡群でも瓦の生産が開始されたことがわかっています。瓦出土遺跡の分布をみると、牛頸窯跡群で瓦つくりが確認されているのは、上大利地区と月ノ浦地区の2ヶ所であることが分かります。



福岡平野の古代瓦出土遺跡 (S=1/4,000)

近年、上大利区画整理地内などの調査により、瓦つくりに関連する窯跡と瓦が確認された事例が増えてきています。このことから以下では、牛頸窯跡群における瓦つくりのはじまりについて、各地区で見つかった瓦の紹介とともに、製作方法や特徴的な瓦について具体的に見ていくことにします。

上大利地区で瓦つくりに関連する遺跡は、下の写真に見るように、野添遺跡4次調査、野添13号窯跡、大浦2号窯跡があります。

野添遺跡4次調査では、窯跡と灰原（窯焚きで出た灰や失敗品を捨てたもの）などが確認され、このうち2号窯跡から6世紀の終りごろ（約1400年前）の須恵器とともに、特徴的な製作手法で作られた瓦が出土しています。5次調査に隣接する野添13号窯跡からは、6世紀の終わりから7世紀前半の須恵器とともに瓦が出土しています。

初めに野添4次2号窯跡から出土した軒丸瓦の特徴について、具体的に見ていきます。凹面は木型や布目の痕はなく、粘土紐を積み上げて貼り付けた痕が見えます。凸面には、粘土を羽子板状の工具で叩き締めた時に付いた平行な線（タタキ）や、瓦を回転させながら櫛状の工具で表面をなでた際に付いた横方向の細い線（カキメ）が確認できます。これは須恵器の壺・甕と共通する製作手法で作られたもので、太宰府市神ノ前2号窯のみで見つかっており、「神ノ前」



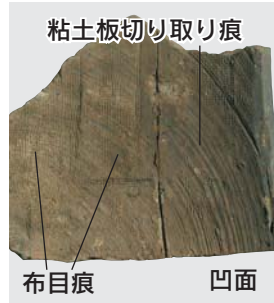
上大利地区の瓦出土遺跡



野添4次2号窯跡の軒丸瓦



月ノ浦I号窯跡の軒丸瓦



大浦2号窯跡の平瓦

タイプと呼ばれています。

大浦2号窯跡から見つかった平瓦の特徴は、凹面は粘土の板を切り取った跡と木型と布目の痕が見えます。凸面はタタキの跡が見られ、先に説明した桶巻^{おけまき}作りによって作られたことが分かります。野添5次調査と関連する野添13号窯跡から出土した平瓦・丸瓦も桶巻作りによって作られており、上大利地区には、「神ノ前」タイプと桶巻作りの2種類の瓦があったことが分かります。

月ノ浦I号窯跡から出土した軒丸瓦の特徴は、表面は型押しによって8枚の蓮の花びらが表現されています。また丸瓦部は、粘土紐を積み上げて製作されています。同じ窯跡から見つかったそれ以外の平瓦・丸瓦は粘土板桶巻作りにより製作さ

れています。また月の浦地区で近年調査された小田浦79地点出土の瓦も同じ手法により製作されているようです。時期は7世紀前半と考えられます。瓦の製作手法の特徴やまとまりから、牛頸窯跡群内の瓦製作の中心が上大利周辺と、月の浦周辺にあったと考えられます。

牛頸窯跡群で作られた瓦の意義 このように牛頸窯跡群では「神ノ前」タイプのような初源的な瓦から本格的な瓦まで継続して瓦が生産されていました。また瓦は、寺院には使われず、近年、対外交渉の施設「那津官家」^{なのつのみやけ}の推定地と考えられている福岡市比恵^{ひえ}・那珂遺跡群で見つかっています。したがって牛頸窯跡群における瓦つくりは、寺院^{じいん}の造営技術の導入に伴った瓦つくりの開始という畿内の要因とは違い、瓦工人の活発な交流により大陸との対外関係に敏感に対応して当時の先端技術を受容したものと想像され、古来より北部九州が日本列島において先進的であり、また大陸への玄関口として国際的であることを感じさせます。

iii) 陶棺の生産（野添遺跡 7次調査）

陶棺とは？ 九州最大の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群では須恵器以外に瓦も生産されていましたが、野添遺跡7次調査では陶棺が生産されていることが新たに分かりました。陶棺とは、たくさんの脚をつけた箱形の棺で、山形あるいは屋根形の蓋がつきます。西日本を中心に全国各地に分布しますが、中でも近畿と岡山周辺に多く分布します。棺は、須恵質のものと土師質のものがあり、近畿には須恵質陶棺、岡山周辺には土師質陶棺が多い傾向があります。これらの地域で陶棺が作られるのは6世紀後半から7世紀中頃のことで、主に古墳におさめられました。

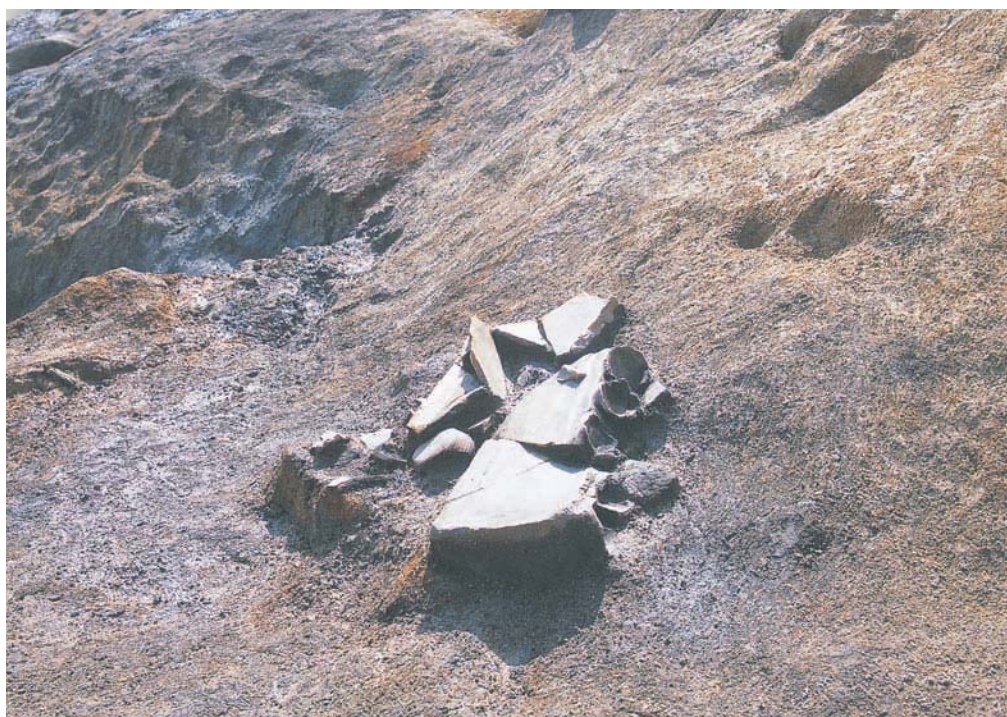
調査の概要 7次調査地は日ノ浦池の南側丘陵斜面にあり、調査前は丘陵を削って谷を埋めて平らに造成し木を植えていました。調査が終わった後は埋め戻して区画整理され、今は住宅地になっています。調査では斜面に窯跡と灰原が確認されました。窯跡は丘陵上部がすでに造成されていたため焚口部が残っていただけでしたが、斜面下方には灰原が厚く残っており、大量の須恵器が出土しました。しかし、須恵器に混じって見慣れない土器の破片があることに気づき、灰原の底から脚のついた陶棺の破片が出土したことから、ここで陶棺が生産されていたことが分かりました。九州で陶棺の生産窯が見つかったのは、初めてのことです。



7次調査出土陶棺（手前の棺蓋は2号陶棺の蓋）

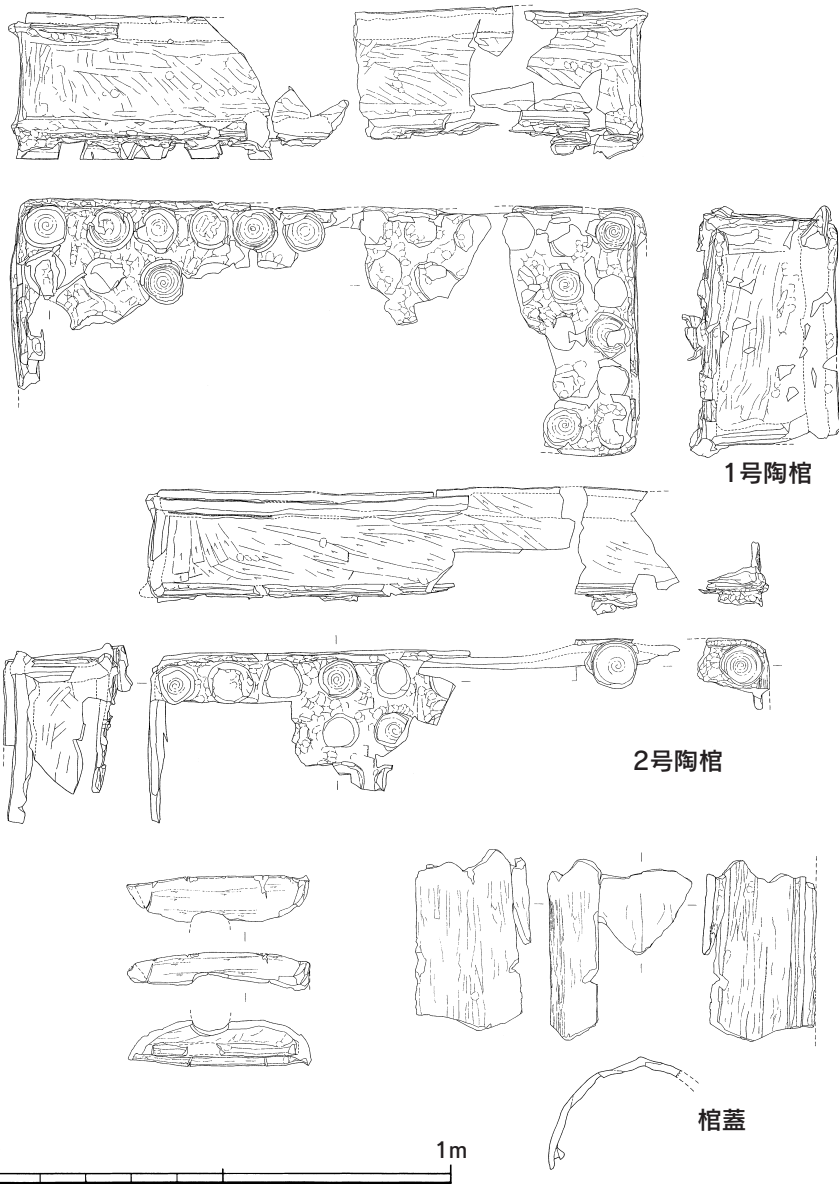


7次2号窯跡全景（斜面下方の黒い土が灰原）



灰原内陶棺出土状況

陶棺を測る 灰原から出土した陶棺の破片をつなぎ合わせていった結果、棺体は2個体、棺蓋は1個体あることが分かりました。棺体は大きいものを1号陶棺（長さ133.2cm以上×幅54.6cm×高さ32.4cm）、小さいものを2号陶棺（長さ115.9cm以上×幅40cm以上×高さ24cm以上）としました。棺の底板には、お椀を伏せたような脚が1号陶棺では5個13列以上と、まるでタコの吸盤のようにつけられていました。通常の陶棺は3個7～8列程度で、これほどたくさん脚をつけた陶棺は他に例がありません。



1号陶棺

2号陶棺

棺蓋

7次調査出土陶棺実測図

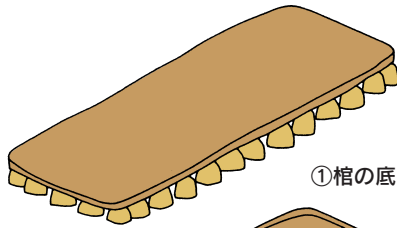
陶棺の作り方（野添遺跡の場合）

さあ、あなたもつくってみよう

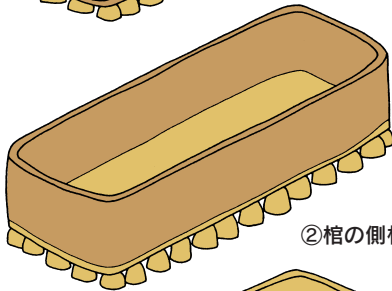


工人のオオミワベさん

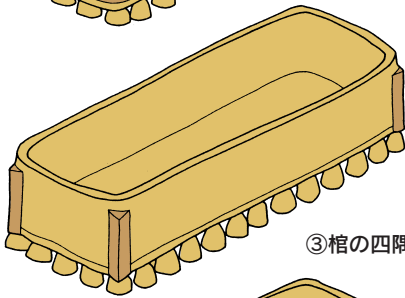
野添遺跡の陶棺は
タコの吸盤みたいに
ビッシリと脚がついて
います。ちょっと他
にはないものですよ



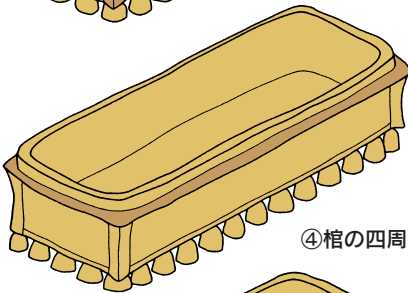
①棺の底板と脚をつける



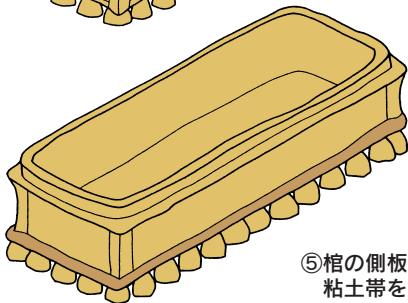
②棺の側板をつける



③棺の四隅に補強粘土帯をつける



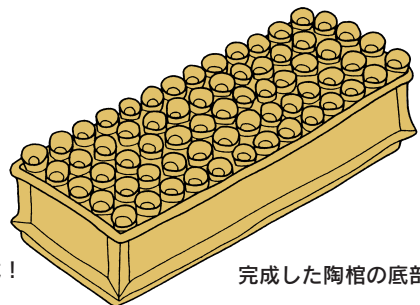
④棺の四周に受部をつける



⑤棺の側板に補強
粘土帯をつけて、完成！

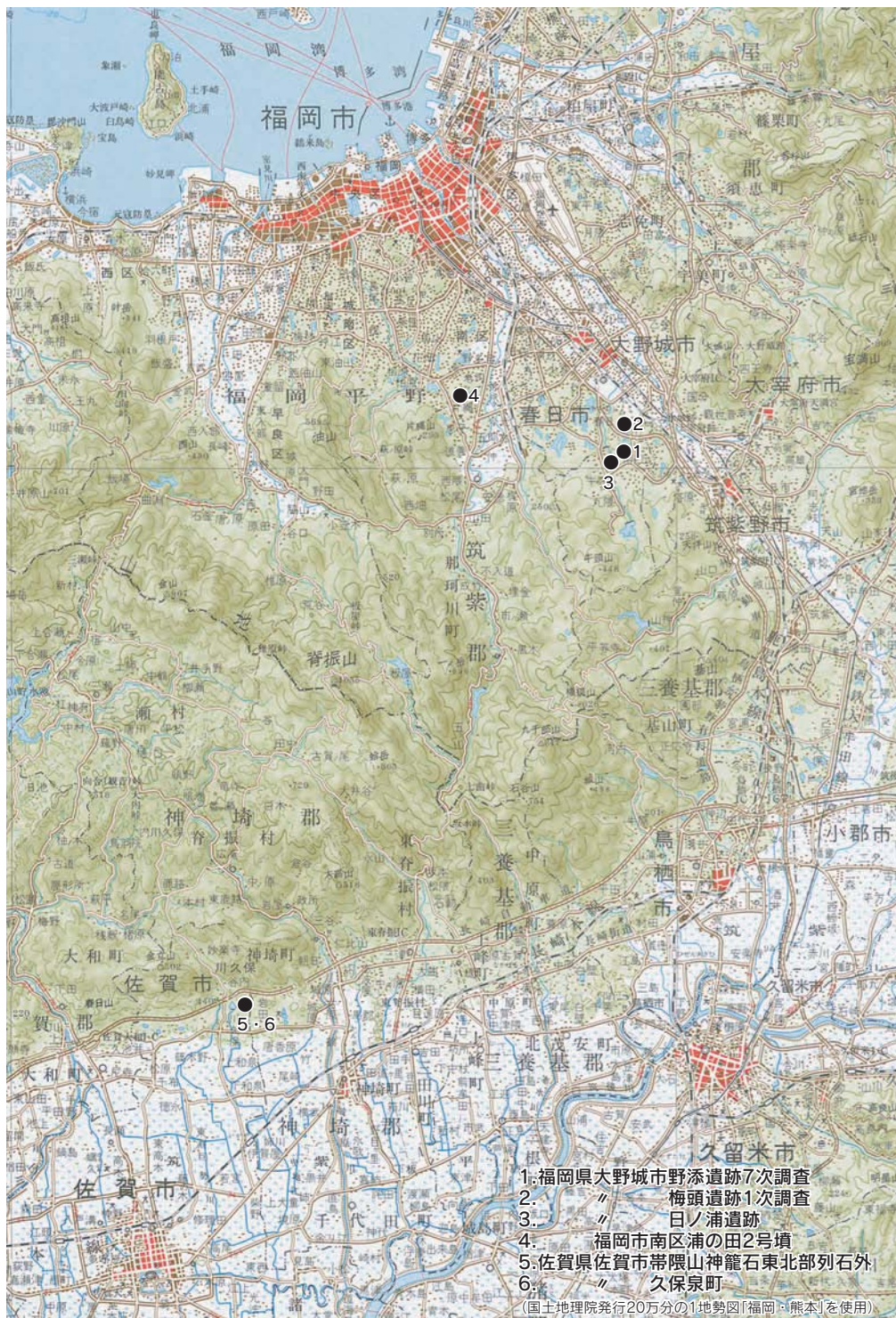


発掘さん



完成した陶棺の底部

陶棺の製作工程図（推定）



九州内陶棺出土遺跡分布図 (1/200,000)

九州の陶棺 陶棺は西日本を中心に全国に分布し、中でも近畿と岡山周辺に分布の中心がありますが、九州で陶棺の出土地としてこれまで知られていたのは、佐賀県帯隈山神籠石の列石近くから出土した例くらいでした。しかし、野添遺跡のように新しく調査された遺跡やこれまでの出土遺物を点検し直した結果、6例の出土例があることが分かりました。6例のうち3例は牛頸窯跡群内からの出土で、群では野添遺跡出土例も含めて複数の陶棺が焼かれたことが分かりました。

牛頸窯跡群の陶棺生産 牛頸窯跡群内から出土した陶棺のうち、最も古いものは梅頭遺跡1次調査1号窯跡から出土したものです。脚部のみの破片でしたが、その特徴は近畿地方で出土する陶棺に近いものです。野添遺跡のものは、棺蓋の形は近畿地方のものと同じ特徴ですが、脚が小さくお椀を伏せたような形をすること、脚がたくさんつけられることなど近畿のものとは異なる特徴もあります。また、1968～69年に調査が行われた福岡市南区の浦の田古墳群では、2号墳の横穴式石室の中から陶棺が出土しました。全体的な特徴は野添遺跡のものと同様であり、これも牛頸窯跡群でつくられたものであると考えられます。

各遺跡出土の陶棺の年代は、梅頭遺跡が6世紀終わりごろから7世紀初め、野添遺跡が7世紀前半と考えられます。以上のことから、牛頸窯跡群では6世紀終わりごろに陶棺の作り方が近畿地方から伝えられ、7世紀前半まで陶棺の生産が行われたと考えられますが、時代が下るにつれだんだん独自の形態へと発展していったようです。

陶棺生産の意義 牛頸窯跡群において、陶棺が生産されるのは6世紀の終わりごろから7世紀前半のことで、技術の源は近畿地方にありました。当時近畿地方には大和政権があり、政治の中心地でした。特に大阪府堺市・和泉市に広がる陶邑窯跡群は日本最大の須恵器窯跡群で、大和政権が直接運営・管理していたと考えられています。群は5世紀初めから操業を開始したとされ、5世紀代には陶邑の製品が日本全国に流通していたことが分かっています。

こうしたことから、牛頸窯跡群における陶棺生産は近畿地方の中でも陶邑窯跡群から技術がもたらされたと考えられます。また、技術がもたらされた背景には、陶邑窯跡群を管理する大和政権との強い結びつきがあったと考えられます。

どこに陶棺をおさめたか 牛頸窯跡群で生産された陶棺のうち、唯一古墳におさめられた浦の田2号墳は牛頸より6km西側にあります。当時は道路の整備はされておらず、途中には山あり川ありで、大きな陶棺を運ぶことは非常に大変なことだったと思われます。しかし、そうした努力をはらって陶棺を持ち込んで古墳におさめていることに大きな意味があります。

九州では陶棺の出土は少なく、特殊な埋葬の方法と言えることから、埋葬された人は牛頸窯跡群に関わりのある人と言えるでしょう。また牛頸窯跡群から離れた浦の田古墳群に陶棺がおさめられることは、周辺の古墳の性格を考える上でも重要です。今後、どこかの古墳で陶棺が発見されれば、その背後に広がる古代の社会状況がさらに明らかになることでしょう。

iv) 大宰府と牛頸窯跡群（野添遺跡2次・4次調査）

牛頸窯跡群の窯のうつりかわり 牛頸窯跡群は約300年にわたって須恵器を作っており、その間、窯の形態や構造はうつりかわっていました。

7世紀後半以前は、窯の全長が10mをこえるような長大な窯が1ヶ所に1基造られ、それを何度も使って須恵器を焼成していました。また6世紀末頃から7世紀初めには、多孔式煙道という直径30cmほどの孔を3～4個並べた煙出しを持つことが特徴です。

7世紀後半以降は、窯の全長が3～4mと極端に短くなり、1ヶ所に2～5基の窯が造られるようになります。これにより、それまでの大きな窯を使う方法よりも、効率よく生産することができるようになったのではないかと考えられています。また7世紀中頃以降は、直立煙道というかまぼこを斜めにしたような窯体に、直立した円筒形の煙出しを持つことが特徴です。

7～8世紀の野添遺跡群 野添遺跡群は縄文時代から人間が生活し、6世紀中頃からは窯で須恵器を焼いていたことが分かっています。ここでは大宰府が成立する7世紀後半以降の窯跡についてみてみます。

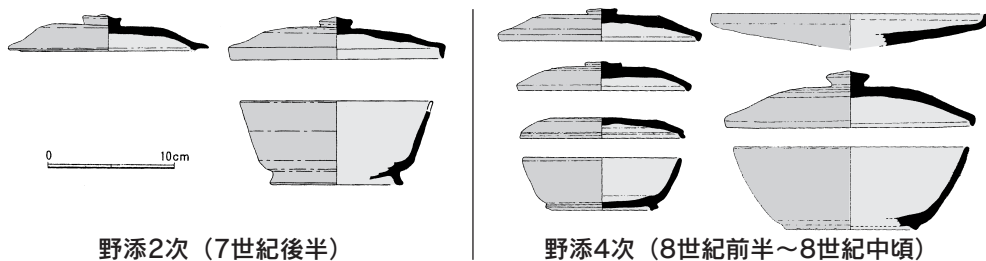
2次調査地は仙頭ヶ浦下池に面した南側斜面に位置します。2号窯跡は残存長3.32m、焼成部最大幅1.44mと小型で、出土した須恵器から窯の操業時期は7世紀後半と考えられます。

4次調査地は仙頭ヶ浦下池南東側に位置します。3号窯跡は、窯跡本体は既に削平を受けており、灰原だけが検出されました。この灰原が伴う窯は何基あったのか分かりませんが、出土した須恵器から窯の操業時期は8世紀前半代と考えられます。

また、権が2次調査2号窯跡の灰原から出土しました。このことは牛頸窯跡群の須恵器生産体制について考える上で重要な意味を持っています。

権 権とはいわゆる秤のおもりです。2次調査出土のものは正面から見ると釣り鐘形で、上部にはつまみが付き、穿孔されています。高さ4.05cm、幅2.8cm、底径2.8cm、重さ24.76gです。土師質ですが、本来は須恵質に焼きあがるはずだったと考えられます。須恵器はロクロを使って作るのが特徴ですが、2次調査出土の権はロクロを使用せず、手で形を作っています。

我が国の度量衡制（長さ・容積・目方をはかる制度）は、7世紀中頃、律令制（法律によつ



出土した須恵器

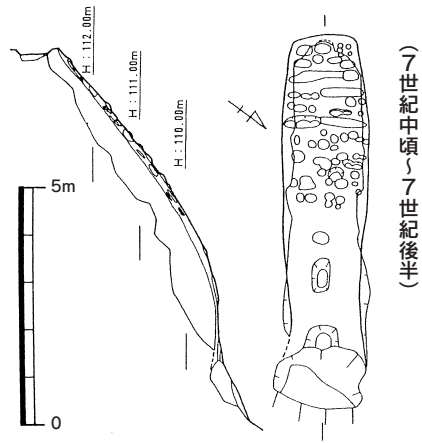
て国を治める制度)に伴い採用されました。また役人らが金属製権を基準器として使っていたという記述が文献にみられ、実際に京・大宰府・国府を中心に出土しています。それ以外の石製・土製(土師質・須恵質)・瓦を加工して作った権も官衙(役所)などから多く出土しています。これらから権は公的に管理・使用されており、2次調査出土の権も窯の工人が勝手に製作したのではなく、指示を受けて製作したことが考えられます。しかし、失敗して捨てられたようです。

大宰府と牛頸窯跡群 大宰府は7世紀後半に朝廷が設置した機関です。初めは国防と対外交渉の窓口というのが大きな役割でしたが、後には筑前国(現在の福岡県西部)だけでなく西海道諸国島(現在の九州地方)を統括するようになります。また、牛頸窯跡群で作られた須恵器が多く出土していることから、権も大宰府に納められるものだったのではないのでしょうか。こういったことから、牛頸窯跡群は大宰府の成立によって、その管理下で効率よく多量の須恵器を生産する体制をとっていたことがうかがえます。



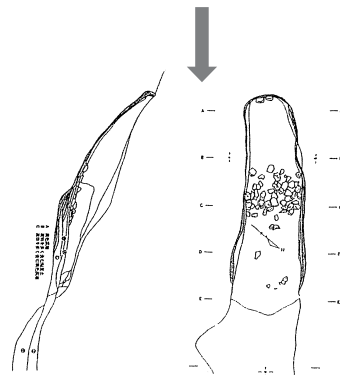
2次調査で出土した権

〈直立煙道窯〉



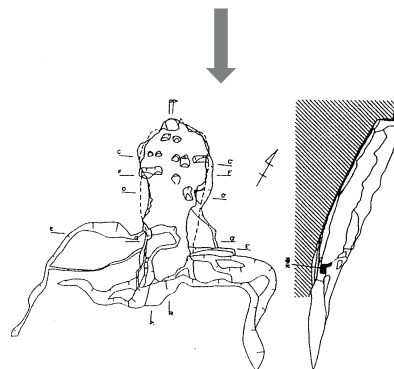
(7世紀中頃～7世紀後半)

後田60-1号窯跡



本堂3次1号窯跡

(7世紀後半～8世紀前半)



野添2次2号窯跡

牛頸窯跡群の窯のうつきわり